青森県総合学校教育センター　長期研究講座報告　[2015.3]
Ｇ２－０３

中学校　社会

中学校社会科の公民的分野において，社会や地域の諸問題を捉え，自ら解決しようとする問題解決能力を高める指導法の研究
－現地での観察・調査・提案などの体験的な学習を通して－

鶴田町立鶴田中学校　　教諭　　須　藤　　崇

要　　旨

本研究は，中学校社会科の公民的分野において，社会や地域の諸問題を捉え，自ら解決しようとする問題解決能力を高めるために，現地に出かけて観察・調査などの体験的な学習を行い，ゲストティーチャーを活用した町政への提案活動を行うことが有効であることを実践的に明らかにしたものである。その結果，社会や地域の諸問題を的確に捉え，自ら解決しようとする意欲や表現が見られ，問題解決能力の向上を示す変容が見られた。

キーワード：中学校　社会　公民的分野　問題解決能力　体験的な学習

Ⅰ　主題設定の理由

中学校学習指導要領において，社会科の目標には「広い視野に立って，社会に対する関心を高め，諸資料に基づいて多面的・多角的に考察し」とあり，公民的分野の目標には「(2) 民主政治の意義，国民の生活の向上と経済活動とのかかわり及び現代の社会生活などについて，個人と社会とのかかわりを中心に理解を深め，現代社会についての見方や考え方の基礎を養うとともに，社会の諸問題に着目させ，自ら考えようとする態度を育てる」「(4) 現代の社会的事象に対する関心を高め，様々な資料を適切に収集，選択して多面的・多角的に考察し，事実を正確にとらえ，公正に判断するとともに適切に表現する能力と態度を育てる」とある。以上のことから，社会科では，教科の特質を踏まえて学習の過程を大切にし，生徒自ら社会的事象を見いだし，それについて課題を設定し追究する学習を重視し，学習を通して更に関心を高めることが求められる。また，多様な側面をもつ社会的事象が，様々な条件や要因によって成り立ち，更に事象相互が関連し合って絶えず変化していることから，多面的・多角的に捉え，考えることが必要となる。

本校生徒の実態は，自分なりの考えはもっているものの，それを全体の場で表現しようとする生徒は少なく，思考の広がりや深まりも不十分である。入手した情報をただ受け入れるだけでなく，多面的・多角的に考察するためには他者と練り合い高め合って，より良い解決方法を見いだそうとする態度が重要と考える。

そこで，生徒の問題解決能力を高めるために，本単元「地方自治」を政治分野のまとめとして構成する。町議会の傍聴，役場での町長に対する提言や聞き取り・観察など，現地での体験的な学習を行い，地域への関心・意欲を喚起し，地域理解を深めさせる。また，町政に携わるゲストティーチャーを活用した提案活動を設定することによって，自分と地域とのつながりを強く意識させ，思考力・判断力の向上を図る。関心・意欲及び思考力・判断力が高まることで，地域の問題解決が生徒にとって切実な学びとなり，最終的には態度・表現力となって表出するものと考える。

このように，個人と社会との関係について考え，社会や地域の諸問題を捉え，自ら解決しようとする姿こそ社会参画の姿そのものであり，国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養うことに資すると考え，本主題を設定した。

Ⅱ　研究目標

中学校社会科の公民的分野において，生徒が社会や地域の諸問題を多面的・多角的に捉え，自ら解決しようとする問題解決能力を高めるために，ゲストティーチャーを活用した現地での観察・調査活動や，それを基にした小集団による提案活動などの体験的な学習を取り入れることが有効であることを，実践を通して明らかにする。

Ⅲ　研究仮説

中学校社会科の公民的分野において，ゲストティーチャーを活用した現地での観察・調査活動や，それを基にした小集団による提案活動などの体験的な学習を取り入れることによって，社会や地域の諸問題を捉え，自ら解決しようとする問題解決能力が高まるであろう。

Ⅳ　研究の実際とその考察

１　研究における基本的な考え方

⑴　「問題解決能力」とは

問題解決能力とは，授業で身に付けた知識や技能，学び方を日常の生活場面に生かし，より良い方向に改善しようとする力と考える。そして，本単元で高めたい問題解決能力の根幹を成すものを，関心・意欲・態度及び活用する力（思考力・判断力・表現力）と捉える。

関心・意欲・態度とは，自ら学ぼうとする力であり，確かな学力の土台を担っている。習得した知識・技能を活用し，現在及び将来に渡り学び続けるためのエネルギー源であると言える。

活用する力とは，思考力・判断力・表現力であり，変化の激しいこれからの社会を生きるために必要な力である。思考力とは，比較する，分類する，関連付ける，構造化するなど多種多様なものである。本単元では，社会や地域がかかえる諸問題を多面的・多角的に捉え，聞き取り調査で得た情報を他と比較したり，関連付けを行ったりすることで，解決すべき課題を決定し，地域振興プランの作成でその解決を目指す。また，判断力とは，価値に基づき選択する力であり，本単元では，町の財政状況や，プランの取り組みやすさ，効果の大きさなど，複数の価値項目を判断の基準として設定する。

⑵　「確かな学力」と「体験的な学習」との関連

確かな学力は，ディペンダブル：信頼できる学術的根拠に基づく学力，ポータブル：持ち運び可能な学力，サスティナブル：持続可能な学力，の３つの条件から成り立つと言われる（無藤・嶋野，2008）。

授業で習得した知識・技能を，体験的な学習の場で活用させることで，持ち運び可能な学力（ポータブル）へ発展させることができる。この習得－活用のサイクルを同時並行で行い，社会参画の方法やプロセスを実感することで学び方を体得し，生涯に渡り学び続けようとする持続可能な学力（サスティナブル）を身に付けることができると考える。

２　研究の実際

⑴　単元名　　第３章　現代の民主政治と社会　第３節　地方の政治と自治　『鶴田町から見る地方自治』

⑵　単元について

本単元は，地方公共団体のしくみや働き，住民としての権利や義務などについて理解し，より良い地方自治の在り方を考え，町政について提案活動を行うものである。生徒は，議会の傍聴，役場での聞き取りなどの観察，調査といった現地での体験的な学習を通し，社会や地域に関する様々な生の情報を手に入れる。そして，集めた情報を活用して，解決すべき町の課題を決定し，その解決を目指して小集団ごとに地域振興プランを作成する。そして，そのプランを学級で発表し，かつ役場で町長へ提言することは，社会参画の活動そのものであり，社会科の目標である公民的資質の基礎の育成に資する活動と考える。

本単元でゲストティーチャーを活用するねらいは，自分と地域とのつながりを強く意識させることである。町づくりに直接携わる方をゲストティーチャーとして活用することにより，生徒は今まで何となく感じていた地域の問題を，より鮮明に捉えるようになる。また逆に，自分たちの身近な生活が町政によって支えられていることにも気付く。地域への愛着と理解が深まることで，社会や地域のかかえる諸問題が，自分たちと深く関わっていることを自覚し，その問題を解決しようとする態度の基礎となるものと考える。

⑶　単元の計画　（10時間）

時	題材	おもな学習活動	関	思	技	理
1	町議会の傍聴	・議会を傾聴し，地方自治の意義について考察。	◎	○		
2	わたしたちと地方自治	・条例，住民の政治参加の方法，直接請求権について理解。 ○単元の学習課題設定 「町をより良くする条例を制定し，鶴田町振興プランを提案しよう。～地方自治を進める上で，最も大切なことは～」	◎	○		

3	地方財政	・町の財政状況の理解。町の予算から町づくりを考える。		◎	○	
4	わたしたちの政治参加①	・町の課題を予想。 ・班で理由や根拠の話合い。現地調査の質問記入。		◎	○	
5	役場での調査活動	・班ごとに聞き取り調査（課題の確認，町の取組）。 ・必要な資料やデータの収集。	○		◎	
6	わたしたちの政治参加②	・班ごとに現地調査の内容を発表。 ・最優先の課題，解決策，条例案を考察。		◎	○	
7 8	わたしたちの政治参加③	・班で話し合い，一つの条例案（鶴田町振興プラン）にまとめる。	○	◎		
9	住民参加の拡大（本時）	・班ごとにプランを発表。互いに評価し合う。 ・ゲストティーチャーから講評・講話。 ・地方自治を進める上で最も大切なことは何か，及び，今後，自分がどのように地域社会に関わっていくか考える。	○			◎
10	役場で町長への提言	・町長・各課長に対し，班ごとにプランを発表し，町長や各課長から講評・答弁をしてもらう。 ・将来の主権者としての意識をもつ。	◎			◎

(4) 本時の学習

ア　題材名　　「住民参加の拡大　町政への提案活動～発表～」（本時９／10）

イ　本時の目標

鶴田町振興プランをグループで発表し，他のグループの提案やゲストティーチャーの講評・講話を聞くことによって，地方自治を進める上で最も大切なことは何か，及び，今後，自分がどのように地域社会と関わっていくか，自分の文章でまとめることができる。

ウ　本時の展開

段階	教師の働きかけ	予想される生徒の反応	評価・留意点
導入	・鶴田町の課題を確認 ・朝ごはん条例の制定にともなう町の変化を示す。	・思い浮かぶ課題を回答。 ・条例の制定で，当時の課題を解決し，町がよりよくなった。	□形態…個人 ・町民の理解，努力，協力もあって実現。
展開	・本時の学習課題を確認 町をよりよくする条例を制定し，鶴田町振興プランを提案しよう。 ～地方自治を進める上で，最も大切なことは何か。～	・本時の見通しをもつ。	
	・ゲストティーチャー紹介 ・グループごとに鶴田町振興プランを発表（他のグループの発表に対する相互評価）をさせる。 ・ゲストティーチャーによる講評と講話 演題「鶴田町の将来」	・ゲストティーチャーの存在を知る。 ・課題，条例，プランを論理的に関連付け，発表する。 ・印象に残ったことをワークシートに記入し，実現の可能性を数値で評価する。 ・ゲストティーチャーからの講評・講話を聞く。町づくりに関わり，地域に暮らす人の思いを知る。自分たちの提案が，今後のより良い町づくりに役立つことに気付く。	□形態…グループ ・各グループ４分 ・良かった点について発表させる。 □形態…個人 ・将来を見通した取組が多いことに気付かせる。
まとめ	・単元の学習を振り返り，まとめを文章化させる。	・まとめを書き，発表する。	◎評価１ 【知識・理解】 ワークシート記述，発表内容 ○評価２ 【関心・意欲・態度】 ワークシート記述，発表内容
	◎　自分たちが暮らす地域に関心をもち，地域をよく知り，課題を解決するために自分たちにできることを考え，それを提案したり，少しでも実行しようとする姿勢・態度が大切である。（＝住民自治） ○　自分も地域に暮らす一員として，広報紙を読むなどして町の現状，課題や取組についてもっとたくさんのことを知るようにしたい。そして地域の行事やボランティア活動には積極的に協力したい。		

３　考察

(1) 問題解決能力について

ア　関心・意欲・態度

本単元の実施前後に行った自己評価アンケート結果から分析した（図１～３）。

図１を見ると，鶴田町の政治への関心度が低かったが，単元終了後の調査では，多くの生徒が町の政治に興味を示している。その理由を見ると「授業をきっかけにいろいろなことを知れた，今回の条例などのために調べたら少し気になってきた，これからどうなるのか知りたい」など，本単元で学んだ知識や，町の政治に直接関わった体験が，より知りたいという更なる学習への関心・意欲につながっていることが分かる。

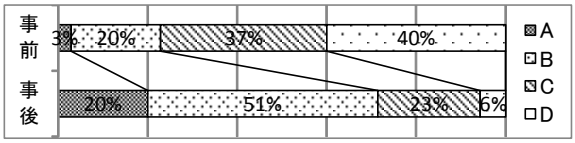

図１　鶴田町の政治に興味がありますか。
Ａ：ある　　Ｂ：どちらかといえばある
Ｃ：どちらかといえばない　　Ｄ：ない

図２を見ると，社会参画（町への提案活動）について，事前は「提案しても採用されない，今のままでいい，やっても意味がない」など，大多数の生徒が参加に消極的な態度であった。しかし単元後は，「やってみて鶴田町のことが分かり楽しかった，自分たちの意見が町の政治に生かされると思う，町民の声がなくては町は変わらない」など，町の政治に直接関わることの意義を理解し，町づくりに積極的に参加しようとする姿勢が見られる。このことは，単元の学習課題に対するまとめ文からも読み取ることができる。内容は以下のとおりである。

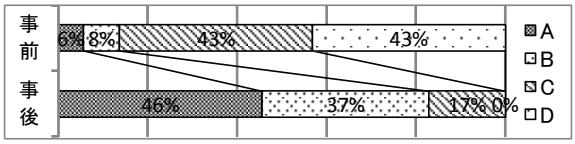

図２　町をより良くする提案活動に参加しようと思うか。
Ａ：思う　　Ｂ：どちらかといえば思う
Ｃ：どちらかといえば思わない　　Ｄ：思わない

◎ 単元のまとめ「地方自治を進める上で，最も大切なことは何か」（抜粋）
- 首長と住民が一つになり協力すること。なぜなら，協力しないと方向性がバラバラになり，まとまらなくなるからです。首長と住民の結び付きが強いほど，より良い町をつくれると思います。
- 地方自治を進める上で必要なことは住民の声だと思います。なぜなら，住みやすい町をつくるためには議員だけだとうまくいかないこともあるからです。
- 地方自治では住民が直接政治に意見を出せるので，それを有効活用すると政治がうまくいくと思います。より良い町のため，面倒くさがらず町民もしっかり参加することが大切だと考えました。

図３を見ると，本単元の学習を通し，社会参画への意識が高まったことがうかがえる。事前は「面倒くさい，よく分からない，誰が町長になっても同じ」などの理由で，半数近くの生徒が投票に消極的であった。しかし，単元終了後は全体の約４分の３の生徒が投票に前向きになった。また，投票したい理由を見ても，事前は「投票してみたい，おもしろそう」など安易な理由が多いが，事後では「鶴田町がもっと良くなればいいと思うから，町の政治に参加していることと同じだから」など選挙の意義にも気付いていることが分かる。

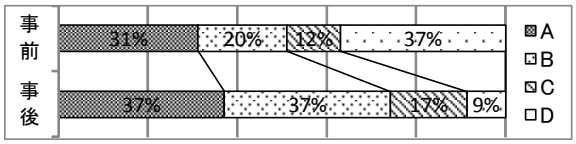

図３　将来，選挙に行って投票したいと思うか。
Ａ：思う　　Ｂ：どちらかといえば思う
Ｃ：どちらかといえば思わない　　Ｄ：思わない

これらのことから，問題解決能力の根幹を成すものと考える関心・意欲・態度の能力が高まったと捉えている。

イ　活用する力（思考力・判断力・表現力）

他単元のまとめ文と，本単元後のまとめ文から分析した（表１）。

表１を見ると，授業前の段階では，単元のまとめ文の記述というと，約半数の生徒は授業で習得した語句や教科書の本文をそのまま抜き出し，それらを羅列して文章にするだけで，思考を表現していなかった。また，自分なり

表１　思考・判断・表現に関する他単元（国の政治）後と本単元後のまとめ文の比較

評価基準	他単元後	本単元後
A…思考が妥当な根拠に基づいている	３％	３５％
B…思考の記述はあるが根拠が曖昧である	１５％	１５％
C…思考の記述はあるが根拠を示していない	３８％	３５％
D…思考そのものを示していない	４４％	１５％

の思考を記述した生徒も，大半は根拠のない思い付きで書いたもので，既習事項や授業で学んだ内容を活用したものとは言えない状態であった。しかし，本単元終了後には，全体の８５％の生徒が自らの思考を記述し，全体の半数の生徒は根拠を示し，思考を表現できるようになった。

これは本単元の学習活動において，「町の現状を理解する段階，町の課題を見付ける段階，その原因を自分たちで予想する段階，役場に出かけて予想が合っているか確かめる段階，町の課題を解決する方法を考える段階，解決方法を提案する段階，役場で町長へ提言する段階」と，学習内容が深まり，広がっていくように，意図的に組み込んだ指導計画が機能したものと考える。また，町の現状と課題とを関連付けたり，他の市町村の取組と比較させたり，解決方法を多面的・多角的に考えさせたりするなど，思考力を具体化して捉えたこと，そして判断に十分な価値・条件を用意したことが有効であったと考える。

これらのことから，問題解決能力の根幹を成すものと考える活用する力が高まったと推測できる。

⑵ 確かな学力について

確かな学力を身に付けるためには，「基礎的・基本的な知識，技能の確実な習得」「知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」の学力の３要素をバランス良く育成することが求められる。

ア　ディペンダブル：信頼できる学術的根拠に基づく学力（「基礎的・基本的な知識，技能の確実な習得」と捉えた）

単元終了後の小テストの平均正答率から分析した（表２）。

他単元後より，本単元後の正答率が高い。どちらも予告なしで行ったため，正答率の数値は低いが，本単元の方が学習内容の定着が高かった。また生徒を個別に見ても，３４名中３２名の正答率が高まっている。

表２　単元終了後の小テストの正答率

他単元後 （国の政治）	平均正答率 ２８．３％
本単元後	平均正答率 ５４．８％

イ　ポータブル：持ち運び可能な学力（「知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等」と捉えた）

単元の小テストの正答率と，まとめ文の思考・判断・表現の評価との関連から分析した（図４）。

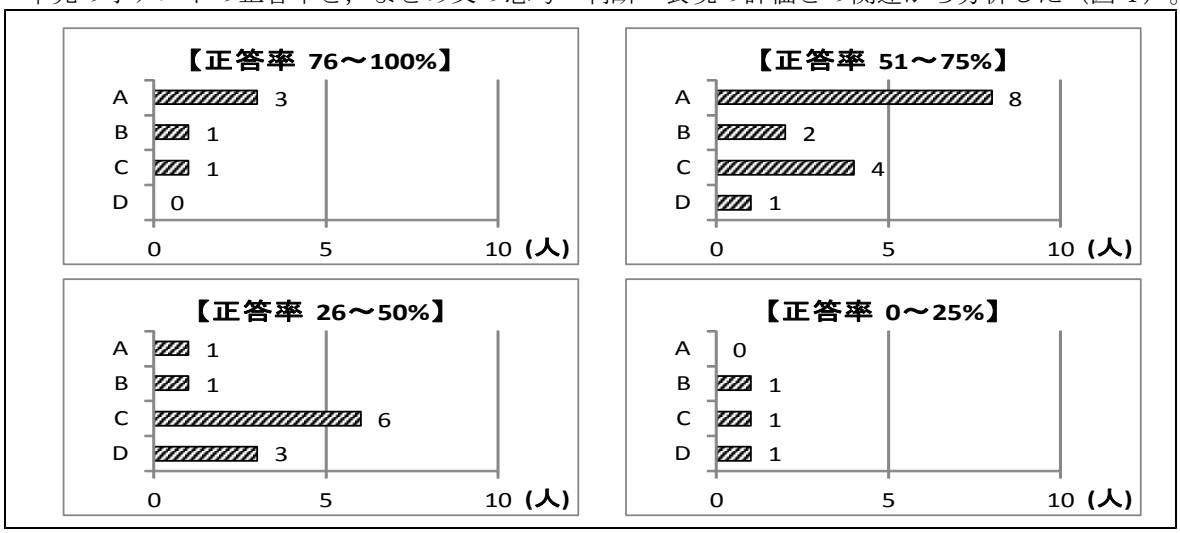

図４　各正答率におけるＡ～Ｄ段階をとった人数

図４は，単元後の小テストの正答率を４段階に分け，単元のまとめ文の思考・判断・表現の評価（Ａ～Ｄ段階）を棒グラフに表したものである。上位群ほど，思考・判断・表現の評価も高くなっている。これは，授業で習得した知識や技能を，体験的な学習の場で活用させた本単元の学習過程によって，両者が互いに関連し合い，学習内容や学習活動が深まっていった成果と考える。

ウ　サスティナブル：持続可能な学力（「主体的に学習に取り組む態度」と捉えた）

本単元の実施前後に行った自己評価アンケート結果から分析した（図５～６）。

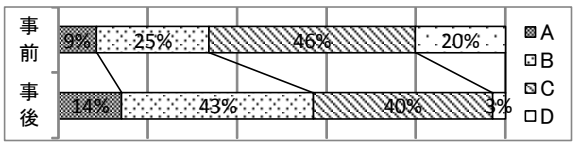

図５　学校の先生以外の方を招いて授業をしたいと思うか。

Ａ：思う　　Ｂ：どちらかといえば思う

Ｃ：どちらかといえば思わない　　Ｄ：思わない

図５を見ると，ゲストティーチャーの活用に関して，事前の調査では約３分の２の生徒が「はずかしい，緊張する，分かりにくくなる」などの理由で消極的であり，勉強は学校の中でやるもので教える人は先生という，学びの意味を理解していない現状を読み取ることができる。一方，本単元終了後には，「いろんなことを知ることができる，自分たちの授業に対するアドバイスをもらいたい，学校で教えないくわしいことを知ることができる，いつもと違うことが学べる」など，外部の人から学ぶことへの意欲に高まりが見られる。

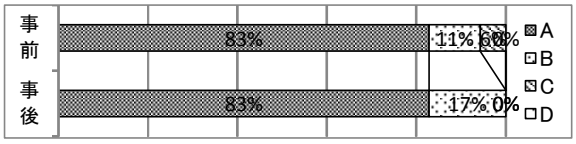

図６　公民的分野で学習したことが，将来役に立つと思うか。
Ａ：思う　Ｂ：どちらかといえば思う
Ｃ：どちらかといえば思わない　Ｄ：思わない

また，図６を見ると，学校の授業で学んだことが将来役に立たないと考える生徒がいなくなったことが分かる。

これらのことから，授業で習得した知識・技能を，体験的な学習を通して活用させることで，確かな学力が向上したと捉えている。

Ⅴ　研究のまとめ

本研究は，公民的分野の学習において，現地での観察・調査・提案などの体験的な学習を取り入れ，社会や地域の諸問題を捉え，自ら解決しようとする問題解決能力を高めることをねらうものであった。

役場での調査活動を通し，役場の職員から聞き取り調査を行った結果，それまで漠然と感じていた地域の問題点を，自分たちのこととして，より鮮明に捉えさせることができた。高齢者福祉に重点を置いている現状に疑問を抱いたり，百歳や第三子へのお祝い金のより良い使い道を考えたり，短命の解決方法を考えていく中で地域の医師不足という別の問題との関連に気付くなど，学習に深まりが見られた。

社会や地域がかかえている諸問題が，自分たちと深く関わっていることを自覚したことで，その問題を解決しようと主体的に取り組んだことが，一定の学習成果となったものと考えられる。そして，町をより良くするために，自分がどのように地域社会に関わっていくか，自分の言葉で表現できた生徒も見られた。

◎ ゲストティーチャーの講話を聞いて考えたこと（抜粋）
・条例を決めたり，町のしくみを変えることは，時間も費用もかかるので，簡単なことではないと思いました。でも，より良い町をつくるために，町民として積極的に政治に参加していきたいです。
・中学生の立場から町に提案することで，新たな何かを得られるということも分かりました。これからの生活で疑問に思ったことやおかしいなと思うところは，役場に行って話してみたいです。

図７を見ると，各班ごとに地域の課題を捉え，自分たちが考えた具体的な解決策を町長に直接提言するなど，現地での体験的な学習活動を行うことにより，地域を自分たちの力でより良く変えていけると，町の将来を前向きに考える生徒が増えた。また，図８を見ると，自分と地域とのつながりに改めて気付き，地域に対する愛着が深まったことが分かる。

これらのことから，現地での観察・調査・提案などの体験的な学習活動は，社会や地域の諸問題を捉え，自ら解決しようとする問題解決能力を高めるために有効であったものと捉えている。しかし，事後アンケートでは，全体の前で自分の考えを，他者に説明したり，表現することができたと感じている生徒は少なく，今後も発表の場を意図的に設定し，振り返りをしっかりと行っていく必要がある。

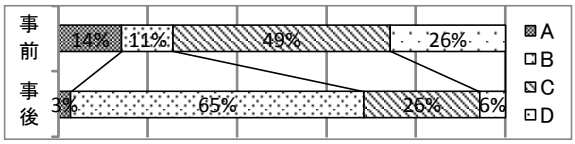

図７　鶴田町は20年後，今より活性化していると思うか。
Ａ：思う　Ｂ：どちらかといえば思う
Ｃ：どちらかといえば思わない　Ｄ：思わない

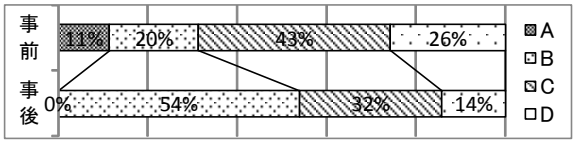

図８　自分は将来，鶴田町に暮らしたいと思うか。
Ａ：思う　Ｂ：どちらかといえば思う
Ｃ：どちらかといえば思わない　Ｄ：思わない

Ⅵ　本研究における課題

本研究で，ペアやグループでの活動では，自分の考えを伝えようとする生徒が増加し（図９），小集団による言語活動の重要性が改めて確認できた。一方，学級全体の場で自分の考えを発表しようとする生徒数の増加は見られなかった（図10）。本単元の学習を通し，生徒一人一人の思考・判断は深まり，一定の成果と捉えることはできるものの，表現しようとする意欲・態度については目指す姿まで到達することができなかった。これでは問題解決能力としては不十分であると考える。今後も意図的に，継続して，指導していかなければならない。

また，社会科の授業で学習したことが，将来役に立つかどうかについて，公民的分野と地理的分野では数値が高まった一方，歴史的分野については数値が伸びなかった（図11）。身近な地域の歴史を調べる活動における指導が不十分であったことが一因と考える。本研究における基本的な考え方が正しいことが立証されたからこそ，社会科三分野に渡り，地域の社会的事象を教材化し，社会参画の基礎を育てていく必要がある。

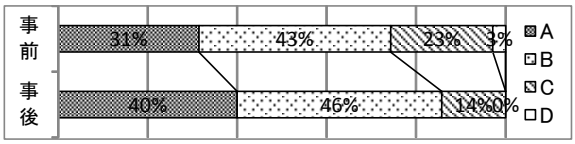

図９　小集団で話し合うとき，自分の考えを他の人に伝えようしているか。

Ａ：している　　Ｂ：どちらかといえばしている
Ｃ：どちらかといえばしていない　Ｄ：していない

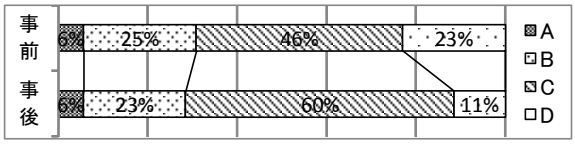

図10　学級全体の場で自分の考えを発表しようとしているか。

Ａ：している　　Ｂ：どちらかといえばしている
Ｃ：どちらかといえばしていない　Ｄ：していない

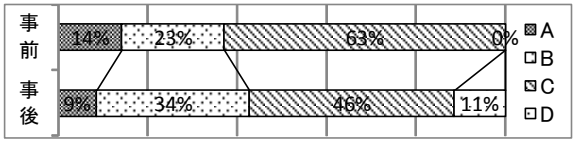

図11　歴史的分野で学習したことが，将来役に立つと思うか。

Ａ：思う　　Ｂ：どちらかといえば思う
Ｃ：どちらかといえば思わない　Ｄ：思わない

＜参考文献＞

文部科学省　2008　『中学校学習指導要領解説　社会編（平成20年９月）』
無藤隆・嶋野道弘　2008　『平成20年学習指導要領対応　新しい教育課程と学校づくり　第２巻　確かな学力の育成』　ぎょうせい